

[招待: 総説・レビュー論文]

現代中国語における発話行為研究の 次のフロンティア

可視化と方法論が拓く展望

The Next Frontier of Speech Act Research in Modern Chinese
Prospects Opened by Visualization and Methods

宮本 大輔

慶應義塾大学総合政策学部准教授

Daisuke Miyamoto

Associate Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

Correspondence to: dafumiya@keio.jp

Abstract: 本稿は、学術誌2誌の論文タイトルを分析、可視化することにより、2つの学会の研究動向を示し、5つの発話行為を方法論とともに整理した。可視化の結果、『社会言語科学』では近年、相互行為、会話分析を主題とした研究が集積し、『中国語学』では構造記述、方言研究が中核で、言語行動研究は限定的だった。レビューでは、DCT→ロールプレイ/口頭DCT→自然談話、会話分析へ至る展開を概観した。今後は、混合法、マルチモーダル比較、および日中接触場面の自然談話コーパス整備を進めることで、現代中国語における発話行為研究の「次のフロンティア」を具体化できる。

This paper maps 2001-2024 trends in *The Japanese Journal of Language in Society* and *Bulletin of the Chinese Language Society of Japan* via title-based correspondence analysis and co-occurrence networks, and reviews five speech acts. Interaction- and CA-oriented topics cluster in the former, while structural description and pedagogy dominate the latter; speech-act studies remain limited. We trace methods from DCTs to role-play/oral DCT to natural conversation/CA, and propose mixed-methods, cross-media/multimodal comparisons, and Sino-Japanese contact corpora to advance the next frontier of Speech Act research in Modern Chinese.

Keywords: 現代中国語、発話行為、会話分析、談話完成テスト、接触場面
modern Chinese, speech act, conversation analysis, discourse completion test, contact situations

1. はじめに

発話行為とは、言葉を発することを通して、依頼、勧誘、謝罪、感謝、断りなどを遂行することを指す概念であり、哲学、人類学、社会学に端を発し、その後、社会言語学、語用論の分野で発展してきた。各言語共同体は、固有の言語習慣を持っており、それは当該言語共同体の文化や社会を反映している。したがって、発話行為研究は、当該共同体の文化、社会の理解に直結する。

本稿は、『社会言語科学』と『中国語学』の2誌を対象に、2001-2024年の論文タイトルに基づく対応分析と共起ネットワークによる計量的可視化を行い、その結果を国内外の

先行研究レビューと接続する。分析単位をタイトルに限定する制約はあるが、長期的な研究動向の把握には有効である。『社会言語科学』は、社会言語科学会が発行している学術雑誌であり、第1巻第1号は1998年に発行されている。社会言語科学会は、言語・コミュニケーションを、人間・文化・社会との関わりにおいて取り上げ、そこに存在する課題の解明を目指す¹⁾学会である。一方、『中国語学』は、日本中国語学会が発行している学術雑誌であり、第1号は1947年に発行されている。日本中国語学会は、中国語学及び関連諸領域の研究を通じ、言語の科学的研究と中国語教育に貢献することを目的とする²⁾学会である。

2012、左方には2001-2006年が布置されている。そして、2001-2006年は、「言語」、「コミュニケーション」、「会話」、「社会」、「研究」、「韓国」、「待遇」、「ポライトネス」、2007-2012年は、「言語」、「会話」、2013-2018は、「言語」、「日」、「比較」、「表現」、そして、2019-2024年は、「会話」、「分析」、「日本語」、「行為」、「相互」といった語と親和性が高いことが分かる。

また、図2の共起ネットワークを見ると、『社会言語科学』の論文タイトルでは、「会話分析×接触」と「発話行為」、「対照、ポライトネス」が中核にあり、「被験者の評価」や「表現、手話」、「教育実践」、「談話」は周縁に個別のクラスターを形成する構造となっていることが分かる。

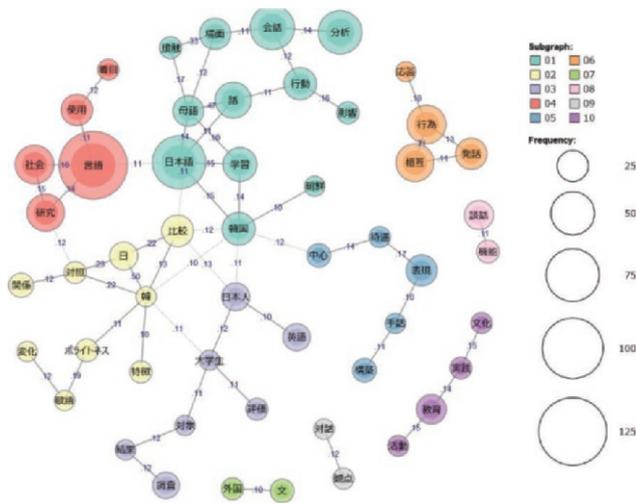


図2 『社会言語科学』論文タイトルの共起ネットワーク図

3.2 『中国語学』

次に、同様の手法を用いて、2001年～2024年の『中国語学』に掲載された研究論文188本の論文タイトルについて前処理を行った。その結果、抽出されたのべ2402語(異なり語数845語)のうち、1350語(654)語が使用されることとなった。ただし、分析にあたり、未知語(ChaSen未登録語)は対象から除外した。以下では、頻出語上位60語を使用して、テキストマイニングおよび年度を外部因子とした対応分析(成分1 = 0.2102(44.94%)、成分2 = 0.1623(34.7%))および共起ネットワーク分析(Jaccard)を行った(図3、図4参照)。

図3の対応分析の結果を見ると、原点(0, 0)付近には2007-2012年、上方には2001-2006年、右方には2019-2024年、左下方には2013-2018年が布置されている。そして、2001-2006年は、「中国語」、「文法」、「構文」、「疑問」、「用法」、2007-2012年は、「認知」、「語」、「成立」、「意味」、「言語」、2013-2018年は、「上古」、「漢語」、「音」、「形式」、「方言」、「語義」、そして、2019-2024年は、「官話」、「資料」、「西」、「分析」といった語と親和性があることが分かる。

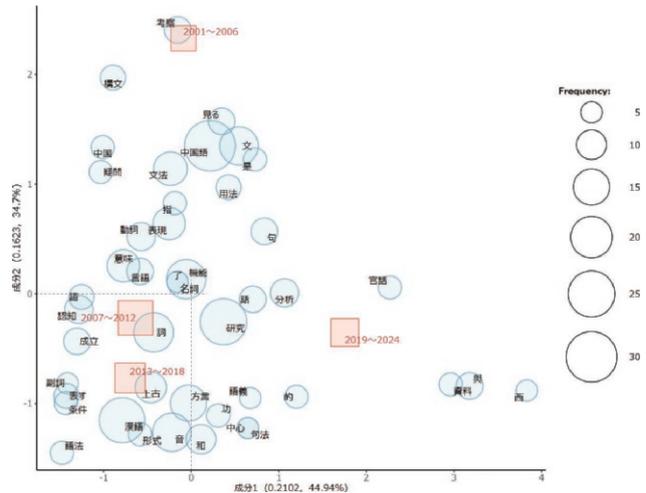


図3 『中国語学』論文タイトルの対応分析

また、図4の共起ネットワークを見ると、『中国語学』のタイトルでは、「中国語の文法研究」を中核とし、「形式と意味、機能の研究」「漢語史、方言、句法、語義の研究」、「西文資料の研究」は周縁に独立クラスターを形成していることが分かる。なお、西文資料は、欧米各国の文字で書かれた資料を指す。一方、会話・相互・発話行為に関する語はほぼ見られず、発話行為研究の存在は限定的である。

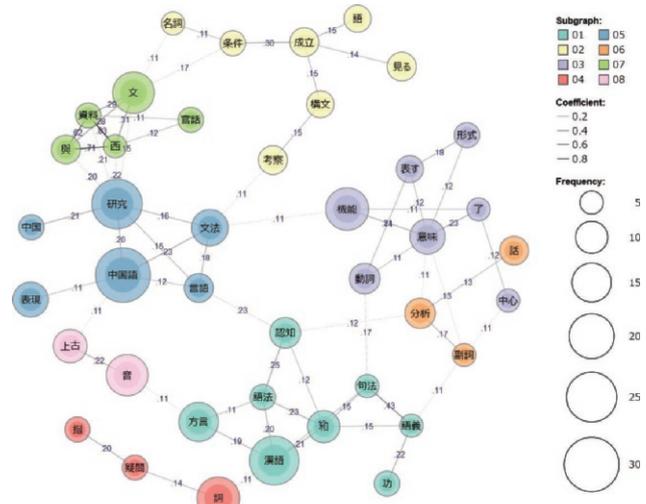


図4 『中国語学』論文タイトルの共起ネットワーク図

図3～4から、『中国語学』248号-271号では、中国語の発話行為に関する論文がほぼ扱われていないことが分かる。そこで、本稿では、国内外における発話行為に関する研究について、俯瞰した上で、今後の中国語を社会言語学あるいは語用論の立場から研究する場合、どのような研究が重要となるかについて概観する。

4. 発話行為研究のレビュー

4.1 依頼の発話行為研究の動向

本節では依頼の発話行為研究について、理論的枠組み、方法論、関係変数の角度から概観する。まず、理論的枠組みとしては、岡本 (1986) が、日本人を対象とした質問紙調査及び口頭調査により、日本語の依頼表現のスタイルが状況との関連でどう変化するかを分析し、A 命令型、不履行非難型、B 依頼型、C 意向打診型、D 願望型、E 話し手事情型、相手事情型の順で間接性が高まることを示した。また、Blum-Kulka (1989) は談話完成テスト (Discourse Completion Task, DCT) を採用し、権力・社会的距離・負担度などの要素を操作して依頼の実現パターンを 9 方略 (mood derivable, performatives, hedged performatives, obligation statements, want statements, suggestory formulae, query preparatory, strong hints, mild hints) に整理した。これらの研究は、依頼の直接-間接を測る標準的な枠組みとなっている。

次に、方法論の面では、DCT および多肢選択式質問 (Multiple-Choice Question, MCQ) は、力 (P) や距離 (D)、負担度 (R) などを統制し、比較可能性を担保できるが、相互行為や逐次的な会話のシーケンスを観察、分析するには限界がある。実際に、黒滝 (2001) は、日本語母語話者の DCT データを用いて、依頼の直接度と内的/外的修飾の分布を記述し、権力 (P)、距離 (D)、負担度 (R) に応じて表現が系統的に調整されることを示し、日韓比較の MCQ を用いた研究として、尾崎 (2005) は、年齢や関係に応じた依頼可能性の差を示した。ただし、結果は一定ではなく、全体的には大きな差は認められなかったとした (尾崎, 2005)。

ロールプレイを採用した研究として、牛 (2021) は日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象としたロールプレイを行い、依頼の前置き表現の選択が、人間関係や依頼内容によって変化することを示した。

そして、BTSJ 日本語自然会話コーパスに基づく会話分析 (大橋・大橋, 2020; ガヤ, 2020; 福島, 2020) では、依頼-承諾、依頼-断りの特性、受諾を伴う依頼と断りを伴う依頼における「配慮」について、それぞれが相互行為的に交渉されるプロセスを可視化した。

さらに、現代中国語における依頼の言語行動について、聞き取り調査した研究 (若生・神田, 2000) や質問紙調査を行った研究 (相原, 2008) もあり、それぞれ人間関係により、中国語の依頼表現が変化することを明らかにした上で、社会や文化、習慣の変化により、表現が変わることも示唆した。

4.2 勧誘の発話行為研究の動向

本節では勧誘の発話行為研究について、理論的枠組み、

方法論、言語間比較の角度から概観する。まず、基本的な枠組みとして、ザトラウスキー (1993) は、電話による日本語談話 A ~ M を分析対象とし、勧誘の話段とその応答の話段におけるストラテジーについて、勧誘者と被勧誘者に分けて体系化した (A1-4 達成志向→否定、B1-4 肯定→否定+思いやり、C1-3 断り→先延ばし、D1-4 肯定→否定+思いやり)。ザトラウスキーがまとめた枠組みは、勧誘の達成、非達成を相互行為的に調整するストラテジーとして、後続研究に広く参照されてきた。

その後の接触場面における勧誘談話の研究は、方法論の多様化により、様々な知見を残してきた。武田 (2006) は、被験者同士による自然談話を録音・録画することにより、日本語母語話者と日本語非母語話者による勧誘談話の勧誘-承諾/断りのシーケンス、ストラテジーの転換を可視化した。また、ロールプレイを用いた黄 (2015) は、中国語母語話者と日本語母語話者の勧誘談話における、承諾場面の終結部の言語行動を比較し、使用される意味公式の配列差に言及した。さらに、許 (2017) は、英語と中国語の表現を参照し、日本語の「肯定命題の否定疑問文」が、勧誘場面における受け入れ促進、負担度軽減の役割を果たしていることを示し、言語間での形式-機能の対応が一对一ではないことを示唆した。

4.3 謝罪の発話行為研究の動向

本節では謝罪の発話行為研究について、理論的枠組み、方法論の角度から概観する。

Olshain and Cohen (1981) は、8つの場面を設定し、英語の非母語話者に対し、音声 DCT を実施し、謝罪の意味公式を整備した。そして、Blum-Kulka (1989) は、談話完成テストを採用し、権力、社会的距離、負担度などの要素を操作して謝罪の実現パターンを比較可能にし、Olshain and Cohen (1981)、Olshain and Cohen (1983) に基づいて、謝罪の方略を Illocutionary Force Indicating Device、Taking on Responsibility、Explanation or Account、Offer of Repair、Promise of Forbearance の 5 つに整理した。

Bergman and Kasper (1993) は、謝罪において、学習者は事態の重さの知覚では母語話者に近い一方、産出では IFID (Illocutionary Force Indicating Device)、説明、補償の選択と配列に差が生じること、熟達度や母語転移が関与することを示した。

現代中国語における謝罪表現について記述した研究もある。彭 (2005) は、北京および上海において、自由記述式質問紙調査を実施し、その結果に基づいて、中国語の謝罪表現には、明示型と暗示型があることを示した。また、趙 (2015) は、DCT に基づいて、日中における、親の関係に

ある相手(家族、親友)に対する謝罪言語行動を調査し、日本語と中国語の謝罪言語行動の違いについて、その要因は、言語的特徴、対人関係観、家族観、地方差が関与していると報告した。

4.4 感謝の発話行為研究の動向

本節では感謝の発話行為研究について、理論的枠組み、方法論、言語間比較、接触の角度から概観する。まず、Eisenstein and Bodman (1993) は、アメリカ英語における感謝表現の種類とその使い分け(状況・相手・負担度)について、DCT、音声 DCT、ロールプレイを用いてデータを横断的に収集し、状況および関係性によるストラテジーの使い分けを実証的に示した。また、同研究は、母語場面、学習者場面、接触場面について、同一の調査方法で分析し、感謝発話に用いられる意味公式(Thanking, Expressing Indebtedness, Complimenting the Giver など)を掲出し、比較可能にした。

Cheng (2005) は、中国において、DCT を実施し、感謝表現ストラテジーを Thanking, Appreciation, Positive feelings, Apology, Recognition of imposition, Repayment, Others, Alerter の 8 つに整理した。この分類は後続研究の参照基準となった。

言語間比較では、Farnia and Rozina (2009) が英語母語話者とペルシア語母語話者を同じ DCT を用いて、両言語における感謝表現ストラテジーの比較をし、英語母語話者は Appreciation や Alerter を多用する一方、ペルシア語母語話者は Thanking, Positive feelings, Apology, Recognition of imposition, Repayment が相対的に多いと報告した。

接触、対照の観点からは、尾崎 (2005) が質問紙を用いて、依頼達成後の反応を測定し、感謝発話の有無とその程度には一定の文化的差異があるものの、関係性や年齢による感謝発話の有無は、日韓で共通していると報告した。さらに、市原 (2018) は、日本語学習者を対象とした質問紙調査を実施し、感謝表現の差異について調査し、感謝発話場面における日中間の違い、接触場面における、日本語学習者の戸惑いと困難について言及した。

4.5 「断り」の発話行為研究の動向

本節では「断り」の発話行為研究について、理論的枠組み、方法論、言語間比較、接触の角度から概観する。「断り」に関する研究は、(1) 学習者と母語話者の発話を比較し、中間言語語用論の観点から学習者の習熟度を検証する研究(加納・梅, 2003; Beebe et al., 1990; 生駒・志村, 1993; 藤森, 1996; ラオハブラナキット, 1997; 李, 2013; 喬, 2016; 稗田, 2022 など)、(2) 2つの言語の母語話者同士を

比較し、文化的差異を明らかにする研究(任, 2004; 元, 2005; 施, 2005; 蒙, 2010; 四谷, 2019; 宗, 2020; 宮本, 2025) が主流である。

中でも Beebe et al. (1990) は、「断り」に関わる意味公式を、Direct (A. Performative, B. Nonperformative statement) と Indirect (A. Statement of regret, B. Wish, C. Excuse, reason, explanation, D. Statement of alternative, E. Set condition for future or past acceptance, F. Promise of future acceptance, G. Statement of principle, H. Statement of philosophy, I. Attempt to dissuade interlocutor, J. Acceptance that functions as a refusal, K. Avoidance) の 2 つに大別した。この意味公式は、標準的な参照枠として位置づけられている。

日本語、中国語を対象とした研究としては、加納・梅 (2002) が DCT を用いて両言語の差異を分析し、中国語話者が以前から指摘されてきたような直接的表現だけでなく、近年では日本語話者に近い婉曲表現を用いる傾向があると論じた。一方、施 (2005) は自然会話データを用い、DCT に基づく言語意識調査との乖離を指摘した。蒙 (2010) は職場における依頼拒否場面を分析し、詫び・理由・代案・呼称といった意味公式の多用を明らかにしている。

また、蒙 (2010) および四谷 (2019) は、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論に則り、意味公式を表 2 のように分類し、ポライトネス理論と意味公式の 2 つの枠組みを用いて、「断り」の言語行動を分析することを試みた。なお、BoR, PPS, NPS は、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論で掲出された概念であり、それぞれ、Bald on Record, Positive Politeness Strategies, Negative Politeness Strategies を指す。

表 2 ポライトネス理論に基づいた意味公式の分類

	蒙 (2010)	四谷 (2019)
BoR	-	結論、非難、断りの正当性を主張
PPS	理由、代案、共感、感謝、呼称、賞賛	理由・代案提示・共感・感謝・交渉・承諾・呼称
NPS	詫び、関係維持、確認、承諾、間投詞的表出、ためらい・相づち	言いさし・詫び・関係維持・確認・間投詞的表出・相手を思い止まらせる試み

蒙 (2010) および四谷 (2019) より筆者が作成

現代中国語における「断り」の発話行為を扱った研究もある。Chen et al. (1995) はアメリカ居住経験を持つ中国語母語話者を対象に、DCT を実施し、依頼・提案・勧誘・申し出に対する「断り」のストラテジーを整理し、その配列差を示した。また、宮本 (2025) は、中国語ネイティブ

1200名を対象に行ったDCTの結果に基づいて、依頼場面の拒否表現を分析し、現代中国語で使用される「断り」ストラテジーには、[謝罪先行型]、[理由先行型]、[呼称先行型]があり、そのうち、[謝罪先行型]及び[呼称先行型]は丁寧度が高く、上司からの依頼を断る際に適していること、[理由先行型]は、友人や親戚からの依頼を断る際に常用されることを明らかにした。

5. 方法論について

Kasper and Rose (2002)、武田(2007)は、発話行為の調査方法についてまとめている。Kasper and Rose (2002)は、調査方法をSpoken Interaction (Authentic Discourse, Elicited Conversation, Open Role Play)、Questionnaires (Discourse Completion Tasks, Multiple-Choice Questions, Scaled-Response Questionnaires)、Oral and Written Self-Report (Interviews, Think-Aloud Protocols, Diaries)の3つに大別した。このほか、作例、小説等からの例文、語学テキストの会話、ドラマや映画台本等を分析する方法もある(武田, 2007)。

上述のように、発話行為に関する調査方法は、多く存在するが、それぞれに限界がある。武田(2007)において言及されている作例や小説等から抽出した例文を対象とした研究は、研究者の内省判断や経験に基づいて分析されるものであり、分析者個人の主観性を克服し、分析結果の客観的信頼性を高める必要がある(彭, 2005, p.211)。

次に、質問紙調査(Questionnaires)は、多肢選択型、自由記述型、談話完成型と分かれるが、広範囲な場面を想定したデータを比較的短期間のうちに、大量に収集できるといのが大きな利点である。一方、得られるのは設定場面における使用意識であり、現実の運用実態と乖離する可能性を完全には排除できない。ロールプレイ(Open Role Play)は、即時応答を伴う相互行為を記録でき、運用実態に近い情報が得られる。しかし、場面は研究者が与えるため、質問紙調査と同様の課題が残る。

そして、自然談話(Authentic Discourse, Elicited Conversation)については、自然発生的な会話／あるいはそれに近い会話であり、現実の運用実態が反映されたものではあるが、特に研究対象とする発話行為が発生するまで待つ、Authentic discourseに関しては、その特性上、観察できる場面は、極めて限定的なものになるというのが大きな課題としてあげられる。

6. おわりに

本稿では、2001年-2024年に学術誌2誌に掲載された論文タイトルを分析することにより、両学会における研究

動向の違いを明らかにし、その上で、国内外における、発話行為に関する先行研究を俯瞰した。その結果、『社会言語科学』は相互行為、会話分析が近年の核となっている一方、『中国語学』は構造記述、教育がコアとなっており、発話行為に関する研究は、非常に限定的だった。

また、先行研究において用いられてきた方法論についてもまとめた。従来の研究では、談話完成型質問紙調査が多く用いられてきた。だが、近年になって、ロールプレイ、自然談話、誘発会話が用いられるようになってきた。どの方法にも課題があるため、DCTで仮説生成→自然談話で検証のように、組み合わせ使用することが望ましい。

加えて、実際の依頼や勧誘、感謝、謝罪、断りといった発話行為が、SNSを通じて行われるようになってきたことを考慮すると、今後は、マルチモーダルな視点での発話行為研究が一層重要になる。

また、研究対象は、単一言語研究、多言語対照研究、および母語話者と学習者の接触場面を扱う研究にまたがる。2誌(『社会言語科学』『中国語学』)の論文タイトル分析からも示されたとおり、中国語を対象とする発話行為研究、とくに日本人中国語学習者の“日中接触場面”に焦点を当てた研究は依然として限定的である。したがって、今後は自然談話・誘発会話に基づく実証研究の拡充に加え、自然会話コーパスの構築が重要な課題となる。

注

- 1) 社会言語科学会 HP-「社会言語科学会とは」より引用 (<https://www.jass.ne.jp/about/information/>)
- 2) 日本中国語学会 HP- 日本中国語学会会則より引用 (<https://ssl.xrea.com/www.chilin.jp/guide/regulation.html#chapter1>)

参考文献

- Beebe, L., Takahashi, T., Uliss-Weltz, R. (1990) “Pragmatic transfer in ESL refusals”, *Developing communicative competence in a second language*, p.55-73.
- Bergman, M. and Kasper, G. (1993) “Perception and Performance in Native and Non-Native Apology”, In Kasper, G. and Blum-Kulka, S. (eds), *Interlanguage Pragmatics*, Oxford University Press, p.82-107.
- Blum-Kulka, S., House, J., Kasper, G. (1989) *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*, Ablex Publishing.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
- Chen, X., Ye, L., Zhang, Y. (1995) “Refusing in Chinese”, In Kasper, G. (ed.), *Pragmatics of Chinese as native and target language*, University of Hawaii Press, p.119-63.
- Cheng, S. W. (2005) “An exploratory cross-sectional study of interlanguage pragmatic development of expressions of gratitude by Chinese learners of English”, Unpublished PhD dissertations, The University of Iowa.
- Eisenstein, M. and Bodman, J. (1993) “Expressing Gratitude in American English”, In Kasper, G. and Blum-Kulka, S. (eds), *Interlanguage Pragmatics*, Oxford University Press, p.64-81.
- Farnia, M. and Rozina, R. (2009) “An Interlanguage Pragmatic Study of Expressions of Gratitude by Iranian EFL Learners –

- A Pilot Study”, *Malaysian Journal of ELT Research*, 5, p.108-40.
- Kasper, G. and Rose, K. R. (2002) *Pragmatic Development in a Second Language*, Blackwell Publishing.
- Olshtain, E. and Cohen, A. D. (1981) “Developing a Measure of Sociocultural Competence: The Case of Apology”, *Language Learning*, 31, p.113-34.
- Olshtain, E. and Cohen, A. D. (1983) “Apology: A Speech-Act set”, In Wolfson, N. and Judd, E. (eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Newbury House Publishers, p.18-35.
- 相原まり子 (2008) 「依頼表現の日中対照研究：相手に応じた表現選択」『言語情報科学』6, p.1-18.
- 生駒知子、志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79, p.41-52.
- 市原明日香 (2018) 「日本語学習者は「感謝」の語用論上の差異をどのように捉えているか：「ありがとう」に対する戸惑いと困難」『待遇コミュニケーション研究』15, p.1-17.
- 大橋純、大橋裕子 (2020) 「雑談に表出する依頼と受諾：「です・ます」体の使い分けと、自然会話を素材とする教材への応用の観点から」宇佐美まゆみ編『日本語の自然会話分析：BTSJコーパスから見たコミュニケーションの解明』くろしお出版. p.67-84.
- 岡本真一郎 (1986) 「依頼の言語テクニスタイル」『実験社会心理学研究』26 (1), p.47-56.
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動の〈関係〉に関する日韓対照」『社会言語科学』8 (1), p.106-19.
- 加納睦人、梅暁蓮 (2003) 「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察：断り表現を中心に」『言語と文化』15, p.19-41.
- ガヤ直美 (2020) 「依頼表現の諸相：依頼の明示性の観点から」宇佐美まゆみ編『日本語の自然会話分析：BTSJコーパスから見たコミュニケーションの解明』くろしお出版. p.45-66.
- 牛晶 (2021) 「依頼発話における中国人日本語学習者の前置き表現の使用実態：日本語母語話者と比較して」『ことば』42, p.233-50.
- 許夏玲 (2017) 「勧誘の場面で用いられる否定疑問文はなぜポライトな表現になるのか」『日本学刊』20, p.78-88.
- 喬曉筠 (2016) 「ビジネス場面における依頼への断り：日本語母語話者と台湾人日本語学習者の比較から」『専門日本語教育研究』18, p.43-8.
- 黒滝真理子 (2001) 「「依頼」表現にみられる日本語から英語への語用論的転移現象」『日本実用英語学会論叢』9, p.1-15.
- 元智恩 (2005) 「日韓の断りの言語行動の対照研究：ポライトネスの観点から」筑波大学大学院博士学位論文.
- 黄明淑 (2015) 「「誘い」談話の「承諾」場面の終結部における中日言語行動の比較：負担度が異なる2場面から」『言語文化と日本語教育』48/49, p.22-31.
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析：勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.
- 施信余 (2005) 「依頼に対する「断り」の言語行動について：日本人と台湾人の大学生の比較」『早稲田大学日本語教育研究』6, p.45-61.
- 社会言語科学会「社会言語科学会とは」<https://www.jass.ne.jp/about/information/> (2025年9月16日アクセス)
- 宗甜甜 (2020) 「ビジネス場面における日本語の「断り」に関する研究」日本大学大学院博士学位論文.
- 武田加奈子 (2006) 「接触場面における勧誘談話管理」千葉大学大学院博士学位論文.
- 武田加奈子 (2007) 「発話行為談話の調査・分析方法：勧誘談話を例に」『接触場面と言語管理の学際的研究』接触場面の言語管理研究5, p.13-35.
- 日本中国語学会 HP 「日本中国語学会会則」<https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/guide/regulation.html#chapter1> (2025年9月16日アクセス)
- 趙翻 (2015) 「日本語と中国語における謝罪の社会言語学的研究：対人関係と地方差に着目して」東洋大学大学院博士論文.
- 任炫樹 (2004) 「日韓断り談話ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6 (2), p.27-43.
- 稗田奈津江 (2022) 「勧誘の断り応答部におけるストラテジーの使用とその解釈：日本語母語話者とマレー語母語話者の比較」『語用論研究』24, p.59-74.
- 福島佐江子 (2020) 「ポライトネスと配慮：受諾と断りを伴う依頼の場合」宇佐美まゆみ編『日本語の自然会話分析：BTSJコーパスから見たコミュニケーションの解明』くろしお出版. p.23-44.
- 藤森弘子 (1996) 「関係修復の観点からみた「断り」の意味内容：日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較」『大阪大学言語文化学』5, p.5-17.
- 彭国躍 (2005) 「中国語の謝罪発話行為のコンテキスト制約：大学生の言語意識調査に基づいて」『中国語学研究・開篇』24, p.200-12.
- 宮本大輔 (2025) 「拒絶請求時采用的汉语会话策略」『東アジア国際言語研究』7, p.205-16.
- 蒙韞 (2010) 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察：日本人会社員と中国人会社員の比較を通して」『異文化コミュニケーション研究』22, p.1-28.
- 四谷晴子 (2019) 「ビジネス・コミュニケーションにおける「断り」のストラテジー：日英語比較研究」『大学院紀要』83, p.51-74.
- ラオハブナキット、カノックワン (1997) 「日本語学習者にみられる「断り」の表現：日本語母語話者と比べて」『世界の日本語教育』7, p.97-112.
- 李海燕 (2013) 「「断り」表現の日中対照研究」東北大学大学院博士論文.
- 若生久美子、神田富美子 (2000) 「中国語における依頼表現の丁寧度」『中国語学』247, p.294-310.

〔受付日 2025. 9. 10〕

